

就職支援のためのプロジェクト・ワーク

－アジア人財コースPBL型授業－

大石 寧子

Oishi, Yasuko

遠藤 かおり

ENDO, Kaori

徳島大学国際センター

要旨：

アジア人財コース2年目にプロジェクト・ベースド・ラーニング型の授業を実施した。就職支援のプロジェクトワークを進めていく中でどのように組み立て、学生たちがどのように係っていったかを検証するとともに今後への課題を含め、考察していきたい。

キーワード：PBL、プロジェクトワーク、現地視察、ブレinstocking、企画書作成、プレゼンテーション

1. はじめに

徳島大学では経済産業省と文部科学省による「アジア人財資金構想」高度実践留学生育成事業に、2008年度から参画し、5名の留学生でコースタイトルを「アジア人財コース」としてスタートした。

本コースは一週間に3日、1.5コマで、使用教材は、本事業の共通カリキュラムを軸にし、新聞等の生教材や市販教材を副教材として取り込み、行われた。

1年目は、内定を取り付けることを第一目標とし、1) ビジネス日本語教育2) 日本ビジネス教育3) インターンシップを3本柱として行った。①ビジネス日本語教育ではエントリーシート の書き方②面接の受け方や③グループディスカッションの方法④自己アピール⑤ビジネスマナー等をテーマとして行った。また2) 日本ビジネス教育では、①業界分析②日本社会における企業文化③社会人基礎力等について学んだ。③インターンシップに関しては、5名とも県内大手企業で2週間実施し、そのうち3人は、そのほかに中小企業で1日のインターンシップをおこなった。

2年目に入り、前期にPBL型授業を行った。ここでのPBLは、就職支援の一環としてのプロジェクトワークとした。

2. PBL型授業とは

2.1 授業の構成と学生の係り方

この授業の位置づけとして、全員就職する学生を対象とし、これまでに身につけた語学知識のみならず、日本企業で如何に業務を遂行していくかを念頭に置き、業務の流れを知り、そこで発生するであろう問題に対してどう対処していくのか、またその過程での事務的作業を経験するというコンセプトで、企画立案からプレ

ゼンテーションまでの流れをシュミレーションし、行った。

次に学生は全員を社員とみなし、学生の中からリーダーを決め、以後はリーダーの下で行われ、教員はファシリテーターに従事した。

テーマとして取り上げたのは「持続可能な地域おこし・地域を売り込む」で、新商品の企画、その販売を目的に以下の流れですすめた。

2.2 調査

2.2.1 テーマ決め

プロジェクトワークを開始する3、4ヶ月前に、NHK2009年秋放送予定の朝の連続テレビ小説の舞台に徳島県南部の「美波町」が選ばれたことが発表された。それによる徳島県地元への経済効果をにらんだ上でテーマとして「地域宣伝」を取り上げ、さらに絞って「地域宣伝用ウェブサイトの作り方」とした。そこで徳島県について何をどこまで知っているかお互いの情報、知識量を確認し合う時間をもった。学生によっては4、5年在住してはいてもあまり徳島に関して情報がないことがわかったため地域に関する基礎的な情報・知識をまず取得することにした。

2.2.2 基礎情報収集

2.2.2.1 徳島県全体に関する情報収集

どんな情報を調査するのかについてリーダーを中心に項目を選び出した。①徳島県の人口、②歴史③地理④交通⑤産業⑥観光地⑦伝統芸能⑧宿泊所⑨名産品⑩有名なもの(所、人)などを取り上げ担当を決めて調査をした。各自、書籍、インターネット、市・県観光協会発行のパンフレットなどを使い、担当者が調べたものを授業の中で発表し、書記担当の学生が板書して、それを共有した。しかしそれでも余りある情報をすべて発表しようとする学生や反対に観光客用の簡易パンフレットに書いてあるこ

としか用意できていないものなど基礎情報としては十分でないため、適宜教員が促した。

2.2.2 教員による補充項目

正確なデータが盛り込まれている「県の観光客動態・動向について現状把握及び分析」と「徳島県観光戦略局発行の「平成 20 年版徳島県観光調査報告書」を用いて現状を読み解き、分析をした。調査内容は以下のとおりである。

①徳島県観光動態調査

観光客の入込状況と消費額

外国人入込客数状況

②徳島県観光動向調査

観光客の観光旅行の指向と実態調査

上記の内容はかなり多くのグラフや表を用いており、2人あるいは3人で数箇所を担当し、調査内容を読み込んだ。各自が担当の調査内容を発表し、お互いに情報を共有することで、グループの基礎知識とした。また、日々の生活情報、季節の催し、地域の新たな取り組みの様子などは新聞から適宜紹介をした。このような授業を進めていくうち、学生から実際に行ったことがないため実感がわからない、一度県南部を見る必要があるのではという意見が出てきた。そこでどこへ行き、何を見るかについて議論し、視察をすることを決定した。

2.2.3 現地視察

訪問地は、県南部の海陽町と美波町とし、学生たちで決めたその目的は、①外国人の目から県南部を見てみる②自然・町の様子を見る③宿泊地・食事処・アクセス等を知る④新たな発見をするとなった。

各町役場の担当者に事前に連絡し、徳島からバスで向かった。海陽町は産業観光課課長の案内を受け、竹が島を見学し、マリンジャムや、遊戯施設等の説明を受け、現地の自然にふれた。事前に決めた担当の写真係り、ビデオ係りが様子を撮影し、記録に残した。美波町では日和佐町役場の担当者と薬王寺・うみがめ館「カレッタ」で説明を受けた。道中、宿泊所、食事処なども目にし、交通の便の把握も行った。この視察に向け事前にアンケートを準備作成して持参した。訪問時に学生から各関係者に回答をお願いし、後に結果を集計し、リーダーがそれをまとめて、発表した。

地域を県南部に絞ったのは、徳島県に関する調査分析作業を通して読み取れた県南部への観光客の客足の少なさと対西部には甚だ劣ることからであった。今回NHKの朝の連続ドラマから全国的に注目を集める地域を実際に見ることを目的とし、その後の企画へとつなげた。

2.2.4 外部講師による講義

PBLを進めるにつれて、自分たちの調査だけでは限界があり、知りえない部分、また専門性を要する項目もあることがわかってきた。このことから、外部から講師を招き、講義を受けることとした。この取り組みに関しては、教員が講師の専攻をし、そのいくつかの交渉はアジア人財キャリアコーディネータの協力を仰いだ。外部講師による内容は以下のである。

①旅行会社による「該当地域を含む商品開発及び現状」②県職員（アジア人財地域連絡会メンバー）による「地方財政の仕組みと地域おこしの事例」③学内教員による「日本の開発途上国援助政策－村起こし等」④中小企業による「海外戦略－東アジア進出」で、上記の講義を聴くに当たって当日の対応等は学生が執り行った。

2.3 ブレーンストーミング

徳島県の現状について基礎調査をし、知識を得る傍ら、外部講師による専門分野の学習も進め、徐々に目指すものを意識し始めたところで具体的な内容を話し合うことにした。プロジェクトワーク開始当初の「地域宣伝」のテーマは、「県南観光ツアー」の企画に目が向けられていたが、話し合いがすすむにつれてテーマは変更され、「観光地を宣伝する画期的なウェブサイトの作り方の紹介」に変わっていった。これは、新しい視点での観光ツアーの開発が、県南について十分な知識を持たない留学生には困難であること、またアジア人財参加学生の中にウェブサイトの入力方法の研究者がいたため、今回の「宣伝用ウェブサイトの作り方」(以下新商品)にたどり着いた。ブレーンストーミングの中で以下のことが絞られていった。

- ・ ねらいは何か。
- ・ 何を売るのか。
- ・ 対象はだれか。
- ・ どうすれば興味を引くか。

など自分たちができること、できないこと等を具体的にあげ、各自が思い描いていることを表現した。ここではブレーンストーミングという方法を取ることで、思いついたことをすばやく相手に伝える訓練の一つとして、習得された。

2.4 企画会議

2.4.1 企画書の作成に関して

リーダーを中心に新商品の発表をプレゼンテーションときめ、プレゼンテーションまでの日程について会議をもち、今後どう進めていけばいいか予定を立て、企画書を作成した。リーダーが役割を決めて話し合い、その結果以下のように取り決め、実施した。

- 1) 各自の担当の振り分け（重複して担当）

- ①新商品の「ウェブサイトの作り方」を見せるための材料としての中身を作成（2名）
- ②その材料となる「地域の売り」を県南のセールスポイントの項目ごとに作成（全員）
- ③新商品の宣伝用キャッチコピー作成(2名)
- ④プレゼンテーションの案内状・チラシ作成・発送・回収(3名)
- ⑤プレゼンテーション（全員）

2) 企画書の作成

各自が担当した項目についてこれまでに話し合ったことを元にして企画書の作成を始めたが、ネットの丸写しや担当項目の趣旨が理解できていない箇所も見られた。また単なる意見や発想のみであり、事実に基づいた根拠が述べられていないなどデータや調査から得られる様々な裏づけがなく、具体的なプランがないといったものであった。そこでプロジェクトを書類として提出する際のポイントは何か、説得性のある内容を吟味し記述するすべを深め、身に着けられるよう授業が進められた。

3) 予定表

プレゼンテーションまでの日程を具体的に割り振りこれ以降は宣伝をはじめ準備に終始した。流れを具体化することで意欲が見られた。以下表-1はその予定表である。

6/29～7/31

回	日		活動内容	その他・備考
1	6/29	月	企画会議① ・日程決め ・企画書作成 ・編集会議①	
2	7/2	木	講義準備 ・ODAについて	7/3の準備
3	7/3	金	講義 「日本の開発途上国援助政策－村起こし等」	外部講師による講義 「政府の取り組み ODA 開発援助」
4	7/6	月	企画会議② ・編集会議② ・チラシ (キャッチコピー) ・案内状①	
5	7/9	木	企画会議③ ・編集会議③ ・チラシ ・案内状②	

6	7/10	金	企画会議④ ・編集会議④ ・案内状③ ・チラシ完成	
7	7/13	月	企画会議⑤ ・案内状完成発送 ・発表準備	
8	7/16	木	企画会議⑥ ・発表準備	
9	7/17	金	講義準備	7/23の準備
10	7/23	木	講義 「海外戦略－東アジア新出」	外部講師による講義 「中小企業による取り組み」
11	7/24	金	企画会議⑦ ・発表準備	
12	7/27	月	プレ・リハーサル	
13	7/28	火	プレゼンテーション当日	
14	7/31	金	振り返り	

表-1

4) 作業報告

始まってみると上記日程にあるように順調に進むわけではなく遅れがみられ始め、学生間に間に合わないのではといった不安感がみられた。プレゼンテーション予定日の変更ということも選択肢に上げ、話し合いがもたれたが、予定が延びればその後の学位論文作成の時期と重なり、かなり難しくなること、またドラマの放送は秋であり、ぜひ始まる前に新商品の紹介をしたいという強い希望もあったことから、リーダーはなんとしても当初の予定日に実行と言う考えを示し、皆をまとめ統率力を発揮した。そこで作業の進み具合をきちんと把握し、現状を全員が理解するよう、報告書を書くことを促した。それにより、作業の遅れ、現時点での問題点その解決に向けての予定の変更等プレゼンテーション当日までの段取りを考えることにつなげた。

2.4.2 各担当の作業

各担当の作業は以下のようである。

1) 新商品のウェブサイトの的中身作成

ウェブサイト研究者を中心に枠を作り、それに材料となる中身の担当者が地域の「売り」となる県南の地理、交通、産業、観光地、伝統芸能、宿泊所、名産品等をのせていったが、ここで使用する映像、音響に関して著作権の問題が浮上し、担当者は勿論であるが、全員が考えることとなった。その結果、現地視察をした際に撮影したビデオ、写真等を用い、音響効果もコ

ピーライトフリーのサイトから使用することにした。この頃には協力体制もしっかりできて、自ら週末を利用して連絡を取り合い作業をしたり、授業後時間の許す範囲で居残り、相談したりする光景が見られた。

2) 宣伝用キャッチコピー

担当者をリーダーに全員にキャッチコピーを募集し、適切なものを絞り込んだ。活発な発想で多くの候補があがり、それぞれが苦心を重ねた。以下にその例をとりあげる。

- ・癒したかったら、徳島南部へ
- ・お疲れさま、大自然を抱き合おう
- ・美波でみなみへ
- ・あなたを待ってる徳島南部
- ・山・水・人・神
- ・回帰
- ・とくしま。美。味。景。
- ・新しい海南

最終的に「あなたを待ってる徳島南部」となった。

3) 案内状・チラシ作成

リーダーが案内状を作成し、その案内状に添える宣伝用配付チラシを他の2名が作成。案内状に関しては、自分たちの言葉で表現できておらず、決まり文句を並べたものに過ぎなかった。チラシのほうは視察で訪れた県南の自然を取り入れ、キャッチコピーを付けたものを作成した。レイアウトや映像の選択は担当者が協力して行った。同時に配付先を選定し一覧表を作成するものの、学生の選んだ先は県内の観光業や自治体をすべてピックアップしたもので、なんら意図を持って選定したものではなかったため、教員が送付先を選ぶ際のポイントを指導した。今回学生はこの新商品にかなりの自信を持っており、多くの分野で使用可能となるため興味を示すはずだと見込み、大勢の人に売り込みたいと考えていたが、教員側で本格的な売込みを目指したプレゼンテーションではあるものの、アジア人財としての大学の授業であることを理解してもらい、無制限の来場はやめにした。そしてどういう視点で送付先を選定するかを話し合った。案内状文面を全員で見直し、再検討した。十分に準備ができているのかどうか、自分たちの取り組みを厳粛に受け止めアジア人財とは、趣旨は、目指す目的は、どんなことをしているのか、これまでにどんなことをしてきたか等確認した。そしてこのプロジェクトワークの取り組みを紹介する文面を案内状に付け加えることにした。

4) 案内状送付先

担当者3名が県と市関係25件、旅行会社、

国際交流協会、観光局等50件あまりを案内状送付先としてリストアップしたが、送付先が絞られていなかったため、上記のことを踏まえ今一度どういった方面で売り込みをしたいのかについて再考を促した結果、外部講師、視察を行った先は必須とし、その他を絞り込み、最終的に30件ほどに案内状を送付した。友人・知人には各自が声をかけることにした。また、これに付随する一連の事務作業を実際に行ってみていろいろなことを知ることとなった。様々な点で手際の悪さが目立ち、どう進めるのか、必要なことは何かを考える機会となった。例えば、準備としてはがき、切手は最大どのくらい必要なのか、案内状の宛名（組織の誰に宛てるか）がわからない、組織の長か、どの地位の方に送ればいいのか、などである。教員からの指示を待つ気配があったため、自発的に判断し解決を見つけ、また手配するよう促した。今回の経験で実務の数々が身についたと思われる。

2.5 プレゼンテーション実施

関係者及び学外関係者を招待し、新商品を売るためのプレゼンテーションを行った。

2.5.1 準備

1) 会場設営

予定会場が使えず、教員が大学側と折衝した。しかし、その会場では無線LANが使えなかったため該当課へ学生が赴き、事情を話し直ちに通してもらうよう交渉した。突然で予想外の出来事に対して迅速に対処する格好の機会だったといえよう。また、立て看板、案内表示等も全員で準備をした。

2.5.2 当日の流れ

当日は、以下の流れで行った。

1. 開会の挨拶
2. 趣旨説明
3. 今回のサイトの特徴について（3①②に関しては、アジア人財参加学生の研究対象を利用）

①アクセス入力が日本語でできる

- ・本サイトへのアクセス方法
- ・本サイトにビデオを取り込んだ場合
- ・本サイトに写真を取り込んだ場合
- ・本サイトに掲示板を取り込んだ場合

②1画面にJR、バス、観光地、土産物、レストラン等へ入る入口を載せる(今回の7ページ)

③日本語版と中国語版の選択ができる(今回の7ページ)

④掲示板がある(今回の7ページ)

⑤外国人の視点からみたお勧め

4. まとめ、今後の課題

ここまでの30分で行い、その後質疑応答とし

た。

2.5.3 当日の様子

受付、資料配布等は学生が行った。リーダーが総合司会を務め、後のメンバーは、担当部分を発表した。本番では緊張のせいと言い間違い、発音、イントネーションにおける母語の干渉等日本語の未熟な部分が随時みられた。これらのことは、実際の会社においては、核心となる新商品の紹介やプロジェクトの説明などの場面では致命的になる恐れがあろう。伝えなければならない内容をきちんと伝えることの重要性を考えさせられた一場面であった。この後の質疑応答ではその結果が歴然と現れた。この発表で重要な「売り」の「サイトの特徴」ではサイト研究者の商品は優れているものの、それはサイト研究者のみが知りえていることであり、当の学生は日本語力の低さからか、十分伝えきれていなかった。しかしながら、その半面プレゼンテーションの時点では十分にチームワークが整ってきており、語学力がある者が発表全体を通してカバーするなどプロジェクトワークの成果もみて取れた。

2.6 振り返り

2.6.1 PBLを通しての学生の取り組み

まず開始が5月18日であり、プレゼンテーションまでの期間が短かったのはかなり厳しいものがあったことは否めない。しかし、学生はこのプロジェクトワークにかなり関心を持ち、意気込んでいたわりには、この2年目が学位論文提出の年となり学生がその準備に入ったこともあり、学生自身もこの両面での迷いがみられ、そのため学生と教員の間にも温度差が生じた。開始後しばらく、切迫感が感じられなかった。このことが後の日程にも影響を与えたと考えられる。次にプロジェクトワークを進めるにあたり、リーダーを中心に展開していくことになったが、協力体制に問題が見られた。当初から担当者制とし、それぞれの持分を担うのだが各自、担当者としての責務を十分に果たせていないことから作業が滞るということが起きた。例えば、①調査が不十分②サイトの丸写し、といった調査法に関する点である。これは学生に時間がなく調査に十分な時間を割けなかったという理由もあるだろうが、責務の軽視が少し見られた。また、情報の共有という点では、伝達、コミュニケーション上での問題が残った。つまり、これは日本語レベルの問題である。自分が考えていることを的確に伝えられないがゆえに、誤解が生じた。しかしながら、活発な意見の対立や白熱した討論をうまく、しかるべき方向へ導いていけたのはリーダーの統率力

が優れていたことによるところが大きかったのではないと思われる。現地視察を行ってからは、拍車がかかり、全員が一丸となって取り組み始めた様子が顕著に見られた。また、予定の遅れを取り戻す協力体制も見られた。

2.6.2 PBLで生じたある事例

今回のPBLで生じた問題を一件紹介したい。プロジェクトワークでのウェブサイトについて相談が必要となった。大学、U-learningセンター、国際センター（以下センターとする）のサーバーを使用するに当たっては、セキュリティの問題があり、使用が難しかったため、研究をしている学生が個人でもっているサーバーを提供するとの申請があった。しかし大学の正式な講座で個人のものに頼ってもいいかという問題が浮上した。万一ウイルスをはじめ問題が生じた場合、責任はどうなるのかなど検討の必要があろうということでセンターにおいて他の教員にも相談し、センターとしての了承を取ることが必要になった。学生としては、今まで整えられた環境で、自由に研究を重ねてきたが、社会に出れば何事も自ら整えなければならず、全てが順調に進むのではなく、必ずそれを拒む壁が存在するということを実感した事例の1つとなったであろう。

3. まとめ

3.1 学生の反省

学生から出た反省点は次のようであった。

1) プロジェクトワーク全体の反省

- ・発表の内容が不十分だった。期待されていることと違っていた。
- ・ウェブサイトの研究者は自身が開発したサイトの入力方法に自信があり、発表当日も入場料を取り、サイトもオークションで売ろうと思っていた。しかし、現実とは全く違っていて、材料としての中身にはコメントがあったがウェブサイトそのものにはコメントがなかった。それはサイトに対しての説明や「売り」への工夫が不十分だったからだと考えられる。技術、内容、デザインなど改良しなければならない。発表者の説明ではアクセス方法がよくわからなかったためあまりサイトに注目されなかったのも、予想と違った。またウェブサイトの説明では準備していたことと違うことを言い、日本語がわかりにくくなった。このサイトに興味がある人は連絡先を聞いてくれると思っていたが、一人もいなかった。
- ・発表までの準備時間が十分でなかった。アンケート調査結果も分析し、発表の中に入れた

ほうがよかった。

- ・プロジェクトワークの手順の知識（企画、調査、発表）が不十分だった。それにコミュニケーションも十分でなかった。
- ・プロジェクトワークのテーマをもっと早く、はっきり決めたほうが良かった。時間を無駄にしたと思う。5人のアイデア、意見がなかなか統一されなかった。統一するのが早ければ、全員の力で早くから頑張れたと思う。
- ・サイトの準備ももっと早くからしておくべきだった。やり直しが多くなるので、いいものを作ろうと思えば、早く作り、何度も改良することが必要になる。全体として、準備不足、まとまりの悪さが反省である。
- ・練習時には全然覚えていなかったが、発表を目前にすると覚えられ、発表のできはよかったと思う。
- ・プロジェクトワークで何を学んだか、今後この経験をどう生かすか考えたい。

2) 来場者の意見に対する学生の反省

- ・南部のサイトなのに、紹介されているのが、数箇所のみなので、南部紹介とは言えないのではないか。もっとたくさんの場所を紹介して欲しかった、という意見に対しては現地調査が1回だけだったので、紹介できる場所が少なかった。何度か調査したほうが良いと思う。しかし、1回の調査で交通の便が悪いということも分かり、これも南部への旅行者が少ないという原因の一つだと理解した。
- ・おみやげについて詳しく聞きたかったという声があり、おみやげの写真を見せるタイミングが悪かったからだが、あとで見せたので、わかってもらえたのではないかな。現地調査で実際に買い、自分で食べてみて紹介すべきだった。

3.2 おわりに

今回のプレゼンテーションは新商品の企画販売という点でかなり問題点を残し成功とは言いがたい。「売り」はウェブサイトの入力方法なのに材料となる中身についての質問に対し何が今回の「売り」で何が添え物かが説明・説得できず、振り返り時にも材料としての中身についての反省が出ていたのがその例でもあろう。しかしながらPBL型授業の目的からは成功だったといえよう。この取り組みを通し、学生は大学での研究と違い、ものを企画し、売るといったプロジェクトを前にして、何が必要かを知ることとなった。そのために欠かせない現状把握、ニーズ調査、等の十分な事前調査に重きがおかれていなかった点や一人ひとりに任された責務、連携や協力体制の必要性、また

自分たちが意図していることが伝わらなかったことへの課題等、十分に学んだのではないだろうか。彼らの反省点からも伺えるように、それは大きな収穫であり、次へのステップとなろう。

【参考文献】

- 大石寧子他（2008）「徳島大学における留学生の支援プログラムーアジア人財資金構想」徳島大学国際センター紀要第4号 25 - 30
アジア人財共通カリキュラム「仕事を知るー企業活動シュミュレーション」（2008）AOTS
佐々木直彦（2003）「キャリアの教科書」PHP研究所